

ノックアウト・ムービーズ

私をKOで打ちのめした映画

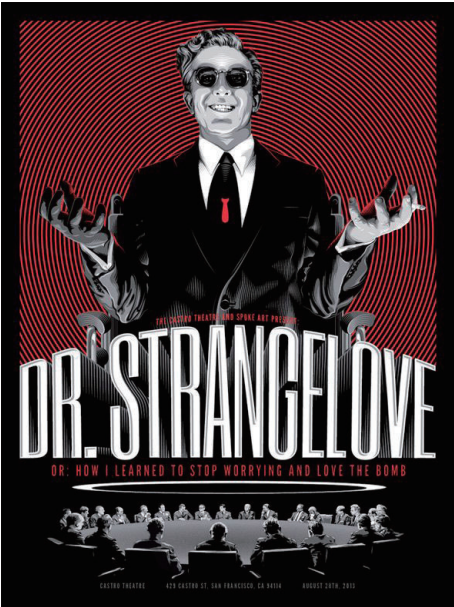


著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 21

『博士の異常な愛情』 Dr. Strangelove (1964 年 スタンリー・キューブリック監督)

市民に「あれもする、これもする」と約束して政権をダマし取り、実は市民を奴隷化し、自由に解放するのは自分自身。さらに遊び儲ける資金は税金。足りなきゃ増税するから順調。ケタ違いの大儲けは、戦争。戦争するためのでっち上げの理由はベットにしたテレビ & 新聞がウソっぱちを拡散するから快調。



「兵士よ、市民よ、脳ミソを使え。ケダモノにダマされるな。人を操るウソつき連中に従うな。自由と民主主義のために闘え！」… 1940 年の映画『独裁者』での当時の世界抜群スーパースター、チャップリンの力説は、地球上各地に轟いたが、「こりゃアマズい！」と永田町は、世界で唯一、1960 年まで上映禁止。観客の目をくらませてる三文手品師にとって種明かしは、都合が悪い。チャップリン同様、若い頃からヨーロッパとアメリカを行き来して育ったスタンリー・キューブリックの『博士の異常な愛情』は、チャップリンの 6 分間の演説を 93 分のブラックユーモア作品に切り換えたよう。



▲ ジョージ・C・スコット

作品中、世界滅亡の大危機をもたらすのは、勲章をぶら下げた軍隊のタフガイたち。体力はあるが能力はない。何がないといっても、とにかく教養がない。頭は完全にやられてる。先輩やコーチを無条件に崇拝させられている運動部に似てて、何も疑わずに命令に従い、それが正しいと確信。



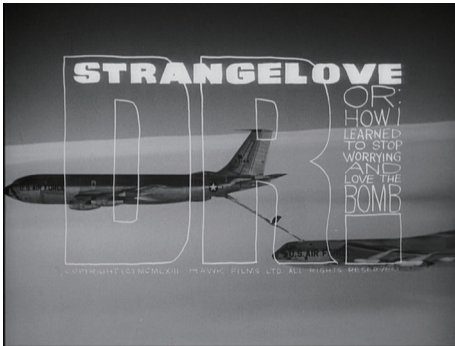
ヒトラーの残像が見え隠れする登場人物たちは「わが国が世界で一番偉大」「民族も世界一」と洗脳されているから、いつ戦争をしかけてもおかしくない。それこそが国を愛する証明だとさえ信じている。『ドクター・ストレンジラブ』の原題どおり、「(国への)変テコな愛」についての映画。なぜ政府は洗脳する？戦争したいから。なぜ戦争したい？大金儲けができるから。でも戦争は危険なのにどうして？本人や、その子どもや家族は、戦場には行かない。市民に行かせるから心配ない。



なぜ、デマかせを人は信用する？自分の目で世界を見てきてない無知は、なんだったってすぐ信じる。どうして、こんな指導者が選ばれる？アメリカの選挙もパスポートさえ持たない大陸の真ん中の人たちがブッシュやトランプを。隣町さえ滅多に行かない島国の指導者に比べたら、彼らでも天使。少なくとも英語を話す。



▲ スターリング・ヘイドン



スターリング・ヘイドン、ジョージ・C・スコット、スリム・ピッケンズらが演じる無教養な軍人たちは体育ばっかりやったカウボーイ系。水爆を落とす操縦士を演じたスリムにかぶらせたカウボーイハットは、のちに『地獄の黙示録』でロバート・デュバルに受け継がれた。1998 年頃、砂漠の真ん中にあるネバダ核実験場で、私を逮捕しそうなったピックアップトラックに乗った警備のおっちゃんもカウボーイハットで、顔はスリムにそっくりだった。当時、核実験場では、細菌兵器を開発中。頻繁に流れる挿入曲「ジョニーが凱旋するとき」は、その後『ダイハード 3』の殺人狂のシーンに。勇ましい曲が、逆に狂気を盛り上げるのが、やはり『地獄の黙示録』で使われた「ワルキューレの騎行」

無能者が集う国会議事堂のような秘密作戦本部に招かれる博士のヒーローはヒトラー。"有識者会議"とやらにノコノコ出揃う雁首(がんくび)に似てる。あの有識者会議という名前はすごい。一般市民は"無知な愚衆"という公務員たちの市民への視線がクッキリ。この勇氣ある命名ぶりには脱帽。

戦闘シーンは、ベトナム戦争のニュース映像のようなカメラセティングでまるで本物。爆撃機の乗員のひとりを演じたジェームス・アール・ジョーンズは、その後『ボクサー』(1970)で白人社会に陥れられた実在の黒人チャンピオンを強烈に演じた。アメリカは強大な悪を行なうが、市民が羊じゃないから、大きな善が反撃もする。学生が有害大統領に「やめろ」と言い、活動家、映画作家が闘う。タブーだらけで、羊化した社会は泣き寝入り。



▲ キューブリック監督

原爆を扱い、公開禁止になった、ポール・ニューマン主演の『Fat Man And Little Boy』(1989)も『To End All Wars』(2001)も永遠に上映されることは、なさそう。本を焼いたナチス同様、独裁国家では禁止事項が多く、自国をチャホヤすることのみが持てはやされる。まさに strange love。家庭でも子どもたちは、親たちに無理やり無意味なことを強制され、そんなのが愛情？… very strange love。

(Lucky Day)

Round 22

『オズの魔法使』 Wizard of Oz (1939 年 ヴィクター・フレミング監督)

人間にない三つのものは「脳みそ」「心」「勇氣」で、それがないと人間じゃない。そのとおりだ。主演のジュディ・ガーランドは大スターとなるが、極めて非人間的な人生に陥る。



「勇氣」

確かに「勇氣」は、全然ない。「留学生は、どの国からも女子と男子が大体半々の割合だが日本だけは9割くらい女子。どうして？」と多くの人が、よく気がきき、なんでもしちゃう素晴らしい日本のママたちが見事に仕上げたマザコン男子たちは、お父さん同様にまったくの役立たずだから、勇氣のかけられないどころか、病的臆病。女性性は、底力(そこちから)タツプリ。のっしのっしと試食コーナーをオトカゲの如く闊歩し、ガツガツとなんでもよく食べるのを見れば生命力を感じる。

賢い善人に勇氣があれば、世界は好転するが、いい人に欠けてるのは勇氣。いいことを知っても何もしない。逆にクルクルバーの悪人たちは勇氣がある。「女は子供を産む機械だ」とか「ナチスの憲法をマネればいい」とか、なんだったって言っちゃうバー大臣やふんぞり返る議員、役人どもは、なんでも「寄り切り」や「浴びせ倒し」の荒技で制する勇氣のかたまり。自分は何もしてないのに、あらゆる行事に来賓の赤いリボンをぶら下げて、堂々としゃべり、満面笑顔で記念撮影に応じる役人たちの底なしの勇氣には唖然。ボンクラ大学を出ただけでロクな実習もなく、いきなり教員になるのも讃えられるべき絶大な勇氣。寿司職人だったら、30 年くらい日夜修行を重ねても、まだ下っ端で、師匠に何かを言う勇氣はない。



▲ ヴィクター・フレミング監督



「脳みそ」

スポーツ選手がわかりやすい例。学業は皆無でも選手を下取りする野球専門高校や体育大学は救済団体みたい。その後も腐敗に満ち満ちたオリンピックに出て、政治利用されても、なんともない、というか、なんにもわからない。オリンピック招致には、大勢の演物壺が詐欺的に超高価なスーツをもらって、一流ホテルに泊まる。電通が5億円を巻き上げた10分のPRビデオにすべてを託す筋肉メダリストたちに英語をしゃべる奴はいないし、それが悪事だという意識はない。ビールのコマーシャルに家族みんなで出たり、警備会社のバカバカしいCMに出るのもへっちゃら。さすがは一流のスポーツマン。脳みその代わりに、勇氣のぬか漬けが詰まってる。



「心(ハート)」

前述のふたつ以上に不可欠なのが「心(ハート)」で、ハートがあれば、不可能はない。不可能が多いのは、ハートがないから。ハートなきママたちの無表情は完全主義の冷血漢。いいことに完全主義ならいいが、自分の都合に合わせさせる完璧主義。「頭が硬い」「頑固」とは、要するに能無しだが、それに加えて「心」が死に絶えたママミーアたちは、アル中の仲間入りするから、もう手遅れ。退屈きわまりないマザコンと結婚したことには同情するが、ストレス発散を兼ねて自分の子供たちに「勉強しなさい!」「宿題やれ!」「受験!」と吠えまくるジュラシック恐竜は重犯罪。

8階級制覇の最強ボクサー、マニー・パッキャオの強さは理解不可能な謎だが、マニーの快拳の理由をきかれた元ヘビー級チャンピオンのマイク・タイソンは、ひと言で答えた「ハートだよ!」… そのとおり。せつかく「ハート」の力は無限なのに、自分さえ信じられない人にはハートはない。ハートがないから自分自身も信じられない。「あの高校・大学に入らなきゃ終わり」「あそこに就職できなきゃダメ」とハエどもに脅かされ続けて、ハートが台無し。冒険心に溢れるべき子どもたちの行く末は「安全安心な公務員だ」から、人生はタニシ。「ハートのないブリキ男」を演じたバディ・エプセンは、身体中に塗られたアルミを吸っていたため、10日間で重病に落ち入り死にかけた。ハートがないと怖い。魔法役のマーガレット・ハミルトンはメイクアップに引火し、やけどの治療に6週間。驚異的なのは、監督のヴィクター・フレミングは『オズ』の公開と同年に『風と共に去りぬ』を完成させていること。



世界中で絶賛された映画史上最高の作品(1939 年公開)は、日本では15年間封印された。民主主義を描く人間らしい作品は上映禁止。世界平和を目指す42の全加盟国から侵略主義を反対されて、国連を抜けてナチスと仲良しになり(1933)、平和の祭典よりも戦争が大事と東京オリンピックをやめた頃(1940)と現代(2017)の世相がソックリという人が多い。



▲『風と共に去りぬ』撮影中のヴィクター・フレミング監督(左から2番目)

「勇氣」「脳みそ」「ハート」のどれかがないと困る。全部がないと原発、放射能、戦争 … 魔法使いでも歯が立たない。

(Lucky Day)